慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二〇一一年度修士論文要旨；二〇一一年度卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2011
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.81, No.3 (2012. 7) ,p.160(514)- 178(532)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20120700-0160

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ある。それゆえ審査委員一同は本研究が博士（史学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学文学部教授・博士（文学）・同大学院文学研究科委員　山本　英史

副査　お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授　岸本　美緒

副査　東京大学大学院人文社会系研究科准教授・博士（文学）　吉澤誠一郎

二〇一一年度修士論文要旨

〔日本史学専攻〕

日本古代史料に見える「武」

藤田　佳希

『続日本紀』養老五年正月甲戌の詔には、「武士」という語が登場する。この「武士」について、中世的武士の源流であるとする説と、中世的武士とは無関係であり、単に武官を指すとする説がある。現在では後者が有力となっているが、「武士」の用例は『続日本紀』以外の史料にも登場するため、これらの用例も含めて「武士」を考えなければならない。よって、本稿では「武士」の用例を詳細に検討した。ところで、「武士」の用例は極めて少ないため、「武」一字に着目して六国史を検討することも行った。この検討を行うことによって、国史編纂者及び朝廷が「武」をどのように位置付けていたのかが明らかになる。先行研究においては、奈良時代には重要なものとされたが、平安時代の嵯峨朝になると、文章経国思想の影響を受けて、「武」は蔑ろにされるようになったとされている。しかし、このことを示す具体的な史料は存在せず、実際に「武」が見下されていたかは疑問である。また、このような変化の中で、「武

士」がどのような影響を受けたのかについては明らかにされていない。よって、朝廷における「武」の位置付けも検討した。

第一章では、古代における「武士」を考察した。「武士」の意味は史料により変化しており、一貫して武官を意味したわけではなかった。奈良から平安初期における「武士」は、実戦的な武術に優れた者や朝廷を警固する者を表していた。しかし、仁明朝になると、宮中儀礼が重要視されたことを受け、「武士」は儀礼において、弓術を披露する衛府官人を意味するようになった。これは、奈良・平安初期には戦乱が多く起こり、軍事が必要不可欠であったが、仁明朝では戦乱が無くなったため、軍事で用いられていた武術は射礼などの儀式において披露されることとなった。よって、「武士」の意味合いは軍事的な存在から儀礼的な存在へと変化したと考えられる。

第二章では、朝廷における「武」の位置付けを考察した。『日本後紀』以前の国史においては、「武」は軍事の抽象的なことから弓術のような具体的な技芸まで表していた。しかし、『続日本後紀』以降の国史では、弓術という具体的な技芸のみを指すようになった。これも「武士」の意味合いの変化と同様に、仁明朝において軍事の必要性が縮小し、儀礼が重視されたために、「武」は技芸のみを表すようになったと考えられる。このような変化が起きたものの、「武」は常に国家的に重要とされた。文章経国思想により「文」が花開いたことは確かだが、これにより「武」が蔑まれたわけではない。

以上、古代の「武士」と「武」の位置付けを考察したが、どちらも仁明朝において変化が起きていたと言える。従来の研究では、「武」＝軍事ということが固定化されていたため、大規模な軍縮を行った桓武・嵯峨朝が、「武」の衰退の契機として捉えられてきた。しかし、「武」は必ずしも軍事のみを指していたわけではなく、技芸も示していた。そして、仁明朝になると、戦乱もなくなり、政治の関心が儀礼に移ると、「武」は弓術のみを指すようになった。さらに、「武士」の意味もこの変化を受けて、軍事的な存在から弓術を披露する存在へと変化した。

中世後期における土倉
―その展開と社会経済的位置付け―

井岡真之介

土倉に関する先行研究は非常に豊富であるが、それは中世社会において土倉の果たした役割の大きさ・多様さにより、様々な問題関心が生まれたからである。特に、中世史を考える上で欠かせないトピックである土一揆・徳政と土倉が深い関係を有していた事実は、土倉研究の進展を惹起した。しかし、土倉に関する研究が細分化する過程で、土倉は何ともイメージし難い存在になってしまった。そこで、本修士論文では土倉の個別活動について具体像を明らかにしつつ、その連関を探り立体的な土倉像の復元を目指した。

まず、第一章では土倉による代官請負について検討した。土

倉が代官請負に関与したことは間違いなく、従来その点について高い評価がなされてきた。しかし、東寺領丹波国大山庄の代官を務めた中西が残した年貢算用状から土倉による代官請負について、その具体像を検討した結果、代官請負そのものからの収益が莫大であったとはいえなかった。さらに代官の選定過程に注目すると、土倉が代官請負に参入するケースも極めて条件依存的であったといえる。ただ、土倉は代官を務めることで来納という形での高利貸しを行いえたのであり、土倉は代官請負の参入には慎重であったが、参入が可能であると判断された場合、高利貸し業へのメリットに鑑みて代官請負を行ったのである。

次に、第二章で土倉の資金調達について、合銭の定義を再検討しつつ考察を加えた。合銭は従来考えられていた小口預金とはいえず、土倉に限らない高利貸し業を営む者達からの土倉に対する大口の融資であったと考えられる。土倉業の中心となる元手は自己資金や身内からの出資からなるのであり、合銭のような純粋な契約関係による資金調達のみでは土倉業は行いえなかった。また、経営規模の大小に依らず、土倉は合銭や祠堂銭などによる資金調達を行っており、その背景には大口の顧客としての在京領主層を想定しうる。彼ら在京領主を中心とする京都の資金需要に対して、土倉の資金力はかなり矮小であったと考えられ、京都に土倉が三〇〇軒も分立しえた要因もこの点に求められる。

第三章では、公家の文書・記録保管のあり方における土倉の位置付けを参考にしつつ、土倉の保護預りについて、その位置付けを検討した。その際に土倉の土蔵と比較されるべき公家の文庫や寺社の経蔵について、それらの多くが土蔵であり、土倉の保管能力を特別視できないという事実を指摘した。また、土蔵の耐火性について、その限界を具体的に検討し、中世人もその事実を正しく認識していた事実を明かにした。そして、従来土倉への預け置きは土蔵によって特徴付けられてきたが、あくまで土倉との人的関係を前提にしている点を指摘した。土倉にとっても質物を預かる方が保護預りを担うよりも利益率は高かったはずで、保護預りは在京領主との関係強化やサービスの一環として行われていた。

最後に第四章で、質物について検討した。質物が土倉及びその利用者にどのように選定されていたのか、さらに季節的な営みの中で質物が展開していた様子も指摘した。また、当該期に盗品が質入れされた事例から、土倉が一概に目利き能力を有した訳ではなかったことを明らかにした。さらに流質した銘品の売却ルートに浄土宗系寺院僧や当時の文化人との土倉の人脈が活用されており、その人脈は土倉の顧客拡大や資金調達にまで及んでいた可能性を指摘した。

以上の考察により、土倉業の中核に位置していたのはやはり高利貸し業であり、土倉とその利用者（特に在京領主）の関係についても高利貸し業を中心に様々な関係を構築しており、代官請負や保護預りは高利貸し業を支える存在であったと位置付けられる。また、土倉というとその大資本にまかせた経営を行

っていた印象を受けるが、実態としてはその人脈や多様な活動を通してはじめてその経営は成立したのであり、彼らは中世社会のあり方を極めて正しく認識し、そこで活動していくために必要な手段をとることのできる判断力を備えた存在だったのである。

中世後期における遁世者の存在形態

田上　雅人

本修士論文では中世後期における同朋衆および遁世者の再評価という観点から以下の三点について論究した。

一点目は「遁世」もつ意味である。中世後期の遁世者、阿弥号を名乗る同朋の「遁世」を巡っては「卑賤の者が貴人に仕えるための手段である」という林屋辰三郎・村井康彦両氏の説が主であった。しかしながら本論で当該期における「遁世」の意味について再考した結果、「遁世」にそのような意識は薄かった点を指摘した。当該期における遁世者の宗教的属性は薄く、遁世者は局外者でしかなく、彼らの「遁世」は単に体制からの離脱を意味するだけである。

二点目は同朋の「故実家」としての側面である。家塚智子氏が提示した「会所の同朋」「御末の同朋」「御供の同朋」に関して再検討を行い、それぞれの同朋の役割は殿中や御成、参内における将軍の身の回りの雑務を補佐することである点を指摘した。そのような業務、殿中における故実、御物管理、贈答儀礼に通じていたことから「故実家」としての役割を担っていたことが指摘できる。また同朋の文化史上の評価については、同朋と倉・御物との関わりを検討し、同朋が御物管理の中心にいたことで培った知識がしばしば指摘されるような「鑑定能力」につながっていくと指摘した。同朋は室町文化の直接の担い手では無く、幕府における役割を通じて間接的に室町文化を支えていたのである。

三点目は特定の主人や家に仕える遁世者の基本的役割が家事雑務にあるという点である。寺院や公家、武家に仕えた遁世者たちは、将軍に仕えた同朋と職掌の上で共通点が多くみられる。彼等は家事雑用が主な役割であった。代々阿弥号を名乗り、共通の役割を担っており、これらの遁世者を指して同朋と呼んでいる例も見られるため、遁世者や同朋が武家社会独自の存在ではなかったことは明らかである。

遁世者や同朋という職掌が代々受け継がれている点、彼等が書物を残している点、故実家という一面を見いだせる点から、「遁世者」という家政を担う職制に近い身分的枠組みが存在していたと考えられる。そして遁世者という局外者が芸能の場に限らず、様々な社会に受け入れられた背景には、中世後期社会が僧と俗との境界があいまいな境であり、「黒衣」や「遁世」への忌避の観念が薄れていった時期であったからと言えよう。

草梁倭館の修理と改建

―資材調達及び建築の観点から―

木村　和代

本論文では、近世の日朝関係を施設面から支えていた草梁倭館が、いかにして維持されていたのかについて、論点を資材調達と建築の二点に絞り、「修理」「改建」の様相を論じた。草梁倭館は、いわゆる鎖国時代に釜山に設置された日本人居留地である。従来の研究では、朝鮮側の視点から、主として制度に注目して考察が進められており、草梁倭館には定期的に修繕が加えられていたことやその費用を朝鮮側が負担していたことなどが明らかにされているため、日本（対馬）側の関与を検討しようとするものである。

第一章では、人員にかかわる諸問題について考察した。草梁倭館の修理や改建では、対馬側の人員が渡海し、朝鮮側の人員と共に作業に参加していた。この体制は、正保三年（一六四六）豆毛浦倭館（古倭館）時代に実施された修理を起源としている。対馬からの人員派遣方法が確立する正徳五年（一七一五）以降の事例を分析すると、対馬側の人員には石工や瓦葺師などが含まれておらず、通常の普請集団とは異なる構成であったことが判明した。これは、賃銀を支給する朝鮮側が、経費の節減を意図したためと考えられる。また、従来の研究では、日朝両国の人員は分業で作業に臨んでいたとされてきたが、草梁倭館の屋根構造に注目することで、両者が協働して作業にあたっていたことを示した。

第二章では、資材調達について分析した。人員の派遣同様に、資材も正徳期に調達方法が確立する。資材は原則として朝鮮側が調達する取り決めになっていたが、実際には朝鮮側が対価を支払い、対馬側が供出していた資材もあった。さらに、資材調達と、草梁倭館における川浚えや茶碗窯などといった他の業務とのかかわりを指摘することができ、修理や改建が決して独り立ちして存在していたのではないことを示唆している。建築に使用した資材そのものを分析すると、とりわけ景観の面では、草梁倭館は日本建築とも朝鮮建築とも異なる様相であったことが明らかになった。

第三章では、草梁倭館の建築について、作業内容の分析を通して検討した。作業はおおむね日本の手法に則って進められていた。草梁倭館に施される修繕は一様ではなく、とくに、館守の住居であった館守家には、享和二年（一八〇二）に大幅な増改築が実施されている。館守家は朝鮮負担で維持されていた家屋であるが、同一家屋内にも「内普請」と「外普請」の区別があり、前者の場合は対馬藩が中心となって修繕を行っていたためである。したがって、修理・改建には、単なる「維持」だけではなく、生活空間の改善といった側面があったということができる。

以上の分析から、草梁倭館の修理・改建は、原則として朝鮮

側が実施することとなってはいたものの、多くの部分で対馬藩が関与していたことが判明した。結果として、おのおのの家屋には日本の技術を採用した箇所を確認できる。それゆえに草梁倭館は、金銭面では朝鮮側、技術面では対馬側の尽力の上に成り立っていたのである。

近代日本衣服史における百貨店の影響
―女性和服を中心に―

加治屋智実

「はじめに」においては、筆者の問題関心を中心に、考察の対象・対象とする地域・対象とする時期や、百貨店研究史に関する先行研究の現状等、本論の前提となる事柄について述べた。筆者の問題関心は、近代以来様々な分野に影響を及ぼしてきたとされる百貨店が、その主力商品であった女性和服を通して、当時の衣服界にどの程度の影響を与えていたのかということである。その当時、女性服飾の流行を作っていたのは百貨店のみであったから、百貨店の流行創出活動を考察することは、そのまま当時の女性服飾界の動向を探ることにつながるのである。なお論文においては、当時の百貨店を代表する三越に焦点を当てて論じている。

第一章「当時の衣服状況」では、本論の前提として、世間一般の衣服状況について考察を試みた。具体的には、和服・洋服の着用率について調査した。史料は、同時代におこなわれた風俗調査や、新聞・雑誌の記事である。その結果、当時の女性たちの衣服は依然和服が大勢を占めていたことを明らかに出来た。また、洋装化を抑圧していた背景についても言及した。その事例として、周囲の人々の奇異の目があったことや、当時の言論界において和服肯定派（＝洋服否定派）が主流であったことなどを挙げた。

第二章「三越における和服と流行」では、前章を前提として、三越が女性和服に対しておこなっていた戦略活動について概説した。とくに、新作デザインを生み出す際に中心となった部署「意匠部」を取り上げた。中でも、意匠部が生み出した代表作「元禄模様」についてはその創出過程にも言及した。さらに、そうした「流行創出活動」をする上での、三越の意識について考察を試みた。

第三章「流行変遷の実態」では、意匠部の生み出したデザインについてより具体的に考察し、さらにそれらが実際世間でどの程度受容されていたか考察を試みた。前者は、三越資料室所蔵「見本帳」・三越発行ＰＲ誌を史料とした。後者は、女性の流行服飾に言及のある新聞・雑誌を史料として検討した。その結果両者とも、「純日本風模様→ハイカラ模様→純日本風模様→ハイカラ模様→二分（そして徐々に純日本風へ回帰）」という流れで一致していた。三越意匠部が、世間の流行に対してある程度影響力を持っていた可能性を示唆できたものであろう。

第四章「流行論をめぐって」では、前章で言及した三越の流

行創出（もしくは流行操作）に対する、世間の反応について考察した。当時、女性たちが流行に夢中になりすぎることは社会問題とされ、「流行是非論」は盛んにおこなわれた議題の一つであった。これに関する新聞・雑誌中の記事を史料とした。その結果として、圧倒的に流行否定派が多く見られた。否定派の意見の中でも、女性たちの過剰な虚栄心が、特に問題視されていたようである。

従来の百貨店史研究では、近代百貨店の「流行創出活動」が注目されていたにも拘わらず、その実態に関する研究がおこなわれてこなかった。本論文第三章での「見本帳」を用いた考察においては、三越が生み出したデザイン変遷の詳細を明らかに出来た。さらにそれらが、実際世間一般にある程度受容されていた可能性を示唆できたことは、一定の意義を見出しうると考えられる。

戦前期ラジオ放送の普及

山中　清史

本論文は戦前期（大正十四年～昭和二十年）のラジオ放送の普及を主題に、その過程や要因、聴取者の実態を同時代の史料を用いて論じていくことを目的とし、それらを通して戦前期においてラジオとはいかなる存在であったのか、その「姿」を明らかにするものである。

まず第一章では、戦前期ラジオ放送の特徴をその当時の社会情勢を含めて述べている。大衆都市文化が花開いた「モダニズム」期に誕生したラジオは、初期の段階から国家の統制下にあり、その後の戦争へと進む昭和の時代情勢の中で成長し、影響力を強めていった。

そのラジオはどのようにして普及が成されていったのか、本稿の主題であるその過程を考察したのが第二章である。第一節ではラジオ普及にあたっての放送局の意識を成立過程と「茨城ラジオ課税問題」を中心に確認し、第二節では実際の普及活動の数々を見ていった。初期においては放送局の経営を安定化させるために聴取者獲得が急務であったし、ある程度普及が進んだ段階でもさらなる拡張を目指し、継続して普及活動が行われている。そうした活動の結果、聴取者数が右肩上がりの成長を遂げたのである。そして第三節では、ラジオ受信機を中心に、普及に寄与した側面を考察した。ラジオ放送は受信機の所有を前提としたものであるため、ラジオ受信機の発達とラジオ普及は関連しており、特に戦時下の経済状況における普及拡大は、安価な受信機の存在に支えられて達せられたものであった。最後に第四節でその他の普及要因として四項目（ラジオファン、民間団体、小売店、新聞）に焦点を当ててそれぞれ検討した。「その他」と一括しているが、どれも普及要因として重要な意味を成している。ラジオの普及を考える場合、その主体となるのは当然放送局であるが、それだけで普及が成立することはあり得ない。放送局以外の特に民間の活動による影響も考慮する

べきである、との問題意識を本節では示している。

続く第三章では普及の実態、聴取者の実状を中心に論じた。第一節ではその概略を、第二節・第三節では都市部・農村にそれぞれ目を向け、同時代の一次史料（聴取者原簿・農村向け番組に対する農民へのアンケート調査）を用いて検討した。メディア史研究において最も重要なのは「受け手」の実態解明である。史料的制約からその実状を明らかにすることは困難を伴うが、今回取り上げた史料はその特殊性も考慮に置く必要はありながら、ある程度「受け手」の姿を見出すことのできる重要なものであったと考えている。

最後の第四章では、ラジオ普及による社会変容について述べた。第一節では、放送番組について触れながらラジオによる新たな文化創造の可能性について言及し、それら全体を以って第二節でラジオの社会的意義を論じた。都市部・農村部での対比を通して、戦前期ラジオは都市偏重のメディアであったことを明らかにしたが、そうした偏りは「受け手」内部における情報格差を拡大させるものとなったと結論付けた。しかも、その格差は都市－農村間だけに留まらず、農村間、農村内部でも同様に作用し、ラジオ所有者／非所有者には著しい情報格差をもたらしたと考えている。そして、その情報格差は都市部の「ラジオ文化」との接触頻度とも関連するため、そのまま双方の文化的格差に繋がることとなった。ラジオ普及が未発達な段階では各地でこうした状況が生まれたものと思われる。それが少しずつ是正されていくのが、戦時下普及率が地方部でも高まっていく時期なのである。

現在、多数のメディアで溢れている中で、ラジオの役割は以前よりも小さくなったことは事実である。しかしながら、ラジオがメディアの中心にあった戦前期においては、その存在が社会的に、文化的に大きな影響を与えていた。戦前期の人々にとってラジオはメディアの中心であり、生活の中心でもあった。それが、戦前期のラジオの「姿」であったのである。

〔東洋史専攻〕

沈玉考
―中国古代の河川の祭祀と玉器の機能―

秦　卓弥

本論でテーマにした「沈玉」とは、文字通り璧や圭などの玉器を河川に沈める意味で、河伯や湘君と呼ばれる河川神に対して祈りを捧げた中国古代の祭祀行為である。こうした「沈玉」の記述は、『春秋左氏傳』、『史記』、『漢書』、『後漢書』、『管子』、『楚辞』、『穆天子伝』、『竹書紀年』などの文献史料に数多く散見され、近年陸続と発掘されている戦国楚簡や侯馬盟書などの考古史料と符号する点も多く、中国古代のプリミティブな文化を色濃く残した祭祀であったと言える。そのため、中国古代の河川の祭祀がいかにして行われたか、また玉器が中国古代の祭

祀においてどのような役割を果たしたかということを考える上で恰好の材料となる。しかし、「沈玉」そのものをテーマに扱った研究は過去に少なく、わずかに林巳奈夫や陳夢家がその著述の中で言及している程度である。本論では後漢までの文字史料にみえる「沈玉」の事例全てに訓読と解釈を施し、林巳奈夫のとったような玉器の用法から「沈玉」を演繹解釈していく方法ではなく、沈の祭儀そのものに着目し沈められるモノから「沈玉」の意味とその文化的背景を探った。

河川神に降雨や治水を祈った沈祭は、玉器を用いた「沈玉」以外に動物犠牲と人牲を用いる供犠祭としての記述が多く文字史料に残されている。たとえば殷代の甲骨文においては圧倒的に動物犠牲（特に牛）を河川に沈めるか否か占った卜占が多く、河川神の祭祀に玉器を沈めるようになったのは少なくとも後の時代に下ることが分かる。また、『史記』滑稽列伝には魏の遺風として、黄河神である河伯が女の人牲を河川に沈めさせてこれを娶る「河伯娶婦」のエピソードが残されている。『風俗通義』に残る李冰の説話でも同じように婚姻形式で女の人牲を長江の神に娶らせるエピソードが残されており、「沈」の祭儀は玉器だけでなく、供犠の祭祀としての性格がもとあったと考えられる。中国古代には降雨の儀式として女の巫を人牲として殺す祭祀が多くあることから、本論では『説文解字』に「巫は玉を以て神に事（つか）へる」とある通り、「沈玉」の玉器は巫（シャーマン）が河川神を憑依させるのに用いた「降神の具」であり、これを沈めるのは巫を人牲として殺す降雨の祭祀と共通するものと論述した。

台湾議会設置請願運動における民族運動者と紹介議員（一九二一―一九三四）

石橋　勳明

本論文は一九二一～一九三四年に日本留学による新興知識人階級（蔡培火・林呈祿等）と台湾土着資本家（林獻堂等）によって行われた「台湾に関する予算の協賛権と台湾において発せられる律令に対する議決権」を持つ「台湾議会」の設置を求める台湾議会設置請願運動に関する研究である。本論文では、日本の帝国議会において請願運動を支援した「紹介議員」が何故台湾人の運動に支援を行ったのかという疑問点を抱き、①台湾議会設置請願運動にどの様な動機で関わり②台湾人と互いにどのような結果をもたらしたのか③日本の政治運動の中で台湾議会設置請願運動はどの様な意味をもっているのか、という3点に目標を絞り研究したものである。

本論文の構成としては、第一章は台湾議会設置請願運動を起こす原因となった台湾総督府の特別委任立法権の六三法の変遷について述べると同時に、台湾議会設置請願運動の前段階ともいえる台湾での二つの運動を紹介する。第二章・第三章では、台湾議会設置請願運動の経過を見ていくのと同時に台湾人と日本人でどのような関わり合いがあったのかを見ていく。第四章

では台湾議会設置請願運動において台湾人の運動に多くの協力者を排出した大日本平和協会と台湾人の関わりについて見ていき、第五章は紹介議員の中から清瀬一郎と田川大吉郎を選び、彼らの台湾議会設置請願運動参加の動機、ならびに彼らの政治運動における同運動の位置を明らかにしていく。

紹介議員達は大正デモクラシーにはじまる立憲政治と普選による民主政治の発展に希望を抱いて、植民地にも立憲政治にもとづく参政権運動として植民地自治の制度を確立させようと台湾議会設置請願運動に参加した。台湾人の指導者が台湾議会設置請願運動の継続に幾度も迷いを生じる中で、紹介議員はその度に台湾人の指導者を激励し運動を継続させた。それは紹介議員にとっても既存の日本政府ならびに政党政治の在り方を疑問視し、国政の変革を訴える事と直結してからである。

台湾議会設置請願運動は結果的に政治的にはなんら成果をださないまま第15回請願後に台湾人指導者等が運動継続を断念したことによって終了したことにより、台湾人の植民地支配下での統治改革要求は失敗した。しかし、彼等を支援した紹介議員にとって台湾議会設置請願運動の敗北は何を意味したのだろうか。

それは彼等の目指した立憲主義・治安法制批判・植民地自治主義が帝国議会内において敗北したことを意味した。そして紹介議員達は自分達が希望的観測をもって目指してきた政党政治への絶望になった。

台湾議会設置請願運動に参加した台湾人、或いは同運動を支援した日本人にとって、台湾議会設置請願運動は大正という時代に、普通選挙法運動による政党政治への期待から始まり、その政党政治への絶望という形をもって終息したのである。

重慶国民政府の対日作戦構想（一九四〇―一九四二）
―西南国境を中心に―

藤井　元博

本論文は日中戦争期における重慶国民政府（以下、重慶政府）の戦争指導と軍事政策について論じたものである。特に注目するのは、西南国境地域を対象とする軍事政策であり、その形成・決定過程を分析する。なお、ここでいう西南地域とは、雲南省と広西省を意味している。また、本論文は、重慶政府の戦争指導と軍事について考える上で、地域に加えて対外政策の重要性、連関性を強調している。それは重慶政府が対日戦を継続するうえで、イギリスやアメリカ、ソ連など諸外国の金融・物資支援を受けなければならなかったという状況による。また、本論文が西南国境に注目したのも、それら対中支援ルートが雲南省や広西省を通っていたという問題に関係している。本論文における議論は、日本軍が西南地域に戦線を拡大する端緒となった、広西省南寧市をめぐる桂南会戦ではじまり、重慶政府がビルマ防衛作戦に参加した一九四二年をもっておわる。つまり、重慶政府が西南における軍事政策に関心を寄せ、対外関係と連

関させて政策を形成し、ビルマ防衛への参加というかたちでの帰結を得るまでを描いている。先行研究では中英関係や外交からこの議論を扱うものが多い一方、西南国境における軍事政策との連動を指摘している点で本研究は新しいといえる。

そこで、第一章ではこの広西省南寧市をめぐる桂南開戦から日本の北部仏印進駐に至る間に注目する。南寧の失陥を契機に、重慶政府が西南への日本の脅威を認識した後、北部仏印進駐への対応をめぐる政府内の論争を通じて雲南防衛論が形成される過程を分析する。

第二章では、前章で雲南防衛論を作った政策担当者たちが、西南国境と東南アジアのイギリス植民地の防衛を結び付けていく過程を検討する。具体的には、重慶政府の高級幕僚が印緬軍事考察団としてビルマやシンガポールなどを視察する過程を検討し、中英軍事協力に奔走する姿を描く。一方で、雲南南部防衛計画の策定過程を分析し、重慶政府中央が対英軍事協力をにらんで雲南南部に作戦計画を打ち立て中央系の兵力を集中させていったことを明らかにする。第三章では、日米対立の下で中英の軍事協力が進展し、最終的に日米開戦で中国軍のビルマ防衛参加が決定される過程を中心に議論する。重慶政府はイギリスとの交渉に強い不満をもっていたが、結局、雲南－ビルマ相互防衛を放棄し、ビルマ防衛への参加を目標とすることになる。他方、雲南における中央系部隊の増強を進め、ビルマ防衛と雲南防衛の両作戦の準備を遂行した。しかしイギリスが合同作戦に消極的だったため、ビルマにおける軍事協力は日米開戦後に実現する。日本の南進という国際情勢のなか、西南国境地域と東南アジアのイギリス植民地を包括して日本に対する共同防衛を実施する壮大な構想に重慶政府の幕僚たちは奔走した。雲南－ビルマあるいはシンガポールの相互防衛論は雲南防衛計画に連動し、重慶政府の軍事政策と対外政策の両面を規定した。その結果、重慶政府は最終的にビルマの共同防衛を追究するのみとなり、ビルマ陥落によって対外・軍事両政策に大きな打撃を蒙ることとなった。

ボルネオ島サラワクにおける華人の歴史
―一八世紀から二〇世紀前半までの華人社会の変動に注目して―

瀬沼　直之

本修士論文は今までに日本において研究が少なかったサラワクの華人史について、一八世紀中葉から日本統治期前までの華人社会の変動に注目して考察するものである。

第一章では全体の考察の前提として、サラワクの地理環境とサラワクと中国の歴史的関係についてまとめた。サラワクの地理環境をミクロの視点から見ると、山脈・森林・河川の三要素が重要であり、マクロな視点から見ると、シンガポールとの近接性が重要である。また、サラワクと中国の間には長い歴史的関係があり、中国史料にも度々サラワクに関する記述が見られ

る。

第二章では、一八世紀中葉から西部ボルネオに成立した華人公司について述べ、それらの公司と後のサラワク華人社会の連続性について論じた。華人公司に属した華人の殆どは客家であり、金鉱山開発の為にボルネオに移住した。しかし、金の枯渇、公司間の械闘等により、多くの難民が生じた。そうした難民が一八二〇年頃からサラワクに流入した。また、本節の補節として、「半山客」という方言集団について概観した。

第三章は、初代の白人ラジャ、ジェームス・ブルックの統治と華人社会について論じた。ジェームスがラジャに就任した当初の華人社会は、中心であるクチンに居住する福建・潮州の商人層と、クチン近郊のバウに居住する客家の鉱山労働者に分かれていた。また、王友海、劉建発、田考といった、後のサラワク社会に大きな影響力を与えた有力華人が移住してきたのもこの頃であった。一八五七年にはバウの客家公司による華人暴動が発生した。この事件はサラワク社会全体に重大な影響を与え、華人社会内部でもバウの客家がクチンの福建・潮州商人の影響下に置かれるという変化があった。

第四章では、第二代・第三代ラジャ統治期の華人社会について考察した。一八六八年に第二代ラジャに就任したチャールズ・ブルックは、サラワクの発展の為に華人が必要不可欠と考え、ガンビール・胡椒の栽培促進策、集団移民の受入政策等をとった。この結果、華人人口が増加した。華人人口の増加に伴い、二〇世紀を迎える頃から、クチン中華商会、サラワク中華総商会など様々な華人団体が設立された。人口増加に加えて、義和団事件、辛亥革命などを契機とした東南アジア華人社会における華人意識の芽生えといった要因が、団体設立の背景として指摘できる。

サラワク華人社会は、以上の変動の末、一九四一年からの日本統治期を迎えた。

東アジアにおける再生産労働の国際移転
―台湾・フィリピン間の家事・介護労働市場に着目して―

岡　由美子

本論文は、台湾とフィリピン間の再生産労働市場における女性移民の実態を明らかにすることを目的とした。「移民の女性化」と「再生産労働」に関する研究は多くなされているが、文化的規範や受け入れ国・送り出し国双方の変遷を含めて検討されたものは少ない。

「移民の女性化」は家事・介護労働などの「再生産労働」が市場化され、高齢化を受けて需要が増加することで起こっている。台湾は経済成長期、国内女性の労働力化を目的に家事・介護労働者の受け入れを開始した。さらに高齢化の進展によって徐々に介護労働部門へ比重が移され、今や台湾の在宅介護は外国人労働者なくしては成り立たなくなっている。台湾では社会福祉機能を政策的に「家族」に求める傾向があり、家父長制的

な道徳規範からも「老親扶養」が重要視されるが、居住形態が変化して困難となった状況下では代替手段として親のために外国人介護労働者を雇って介護してもらう「親孝行の代理」が行われている。台湾では伝統的に家庭内に補助労働力として他人を雇い入れる習慣があったことも影響し、柔軟な労働力として移民を使うことが一般化している。また、男児選好による男性過剰の状況を受けて結婚移民も多く、特に家族形成・介護労働力確保の手段として外国籍配偶者が選択されている。

一方で、送り出し国のフィリピンは、アメリカ植民地時代から海外雇用の歴史を持ち、中東のオイルショックを契機に本格的に国を挙げて海外雇用政策に乗り出した。国内での就業機会の減少、余剰人口の滞留などのほかに、英語力や家族紐帯の強さなどもフィリピン特有の押し出し要因として存在する。近年、政府は家庭内での就労が多く不可視化されやすい女性労働者の権利保護を進めているが、「使いやすく」安価な労働力を求める受け入れ国側の雇用主との間に意識のずれが生じ、需要が減少するという事態が起きている。

台湾とフィリピンの事例を通して、受け入れ国において女性移民が「親孝行」、「家族形成」の規範を維持するために、あるいは福祉の「家族化政策」を維持するために動員されているという構造的な問題が浮かび上がる。

キョルオール英雄叙事詩における主人公の人物像

木谷　舞里

キョルオール叙事詩（Köroğlu Destanı）はテュルク系諸族を中心に広い範囲で伝承されてきた英雄叙事詩であり、その地域性や内容の豊富さから多様な研究の可能性がありうる。しかし、内容に踏み込んだ研究には乏しく、起源研究が議論の中心であった。本稿ではこうした研究の状況を整理した上で、キョルオール叙事詩の内容を具体的な事例を用いて分析し、キョルオールの人物像を明らかにしようと試みた。

まず、キョルオールの愛馬や家族、そして仲間たちとの関係性を検討した。馬とキョルオールは不可分な存在として描かれており、物語の展開に大きく寄与している。家族像では特に、世代を超えた父親と息子の強固な関係性が描かれた。婚礼はキョルオールにとっての一つの試練であり、成長を遂げる契機でもある。キョルオールの仲間たちは非血縁集団として様々な社会層の人間によって構成され、養子の存在がそれを象徴していた。

次に、重要な主題のひとつである戦いについて分析を試みた。キョルオールの敵として描かれる人物はキョルオールの個人的な敵であり、『デデ・コルクトの書』に見られるような共同体の敵としての性格は薄いと考えられる。そうした敵との戦いに

際して、キョルオールが一騎打ちで敵を打ち倒す姿や一人で大勢を蹴散らす姿が描かれ、その圧倒的な強さをより強調している。

最後に、キョルオールは物語中で多くの歌を歌うが、彼の歌は妨害を受けず、その才能は高く評価されて彼の武勇と名声を世に知らしめることとなった。さらに、キョルオールは受けた恩に誠実に報いることを特に重視したことも重要な点として指摘した。過去に受けた仇を追求せず、相手が敵であっても恩を返そうとする価値意識は仲間の間にも共有されていた。

以上のことから、キョルオールの人物像の中には少なくとも三つの人物像を想定することが可能である。一つめとして、名馬の存在や父子関係、試練としての婚礼などは「英雄」としての側面を示しており、『デデ・コルクトの書』に見られる英雄像に一致する。二つめとして、キョルオールが為政者としばしば敵対し、異なった価値観を有している点、街に定住せず移動する点は必ずしも「英雄」と合致するとはいえない。よって、これらは「無頼」の側面として理解することができる。三点目は、キョルオールと歌の密接な結びつきから「詩人」という人物像を見て取ることが可能と考えられる。

〔西洋史学専攻〕

出版の自由と市民社会
―バーデン大公国における自由主義者の理念と活動―

木村　航

本稿はドイツ連邦加盟国のバーデン大公国を舞台として、自由主義者の社会理念を出版の自由に関する見解や運動を手掛かりに再考するものである。自由主義者の社会理念については、一九七五年のL・ガルの主張がこれまで議論のたたき台になってきた。それによれば、一九世紀前半のドイツの自由主義者にとって、「社会」とは自立した家父長からなる共同体であり、彼らは「階級なき市民社会」を目指していたというものであった。こうした主張は、自由主義者が「中間的身分」という言葉を用いていたことや彼らが手工業者を利する経済政策を支持していたことが確認されたことで、広く認められるところとなった。しかしながら、「階級なき市民社会」という理念の存在は認められたものの、これまでの研究は、自由主義者が下層の人々に対して不信感を抱いていたことや制限選挙の存在などを引き合いに出すことで、自由主義者の社会理念の限界を強調するきらいがあった。また、自由主義者がそうした「社会」を目指していたかどうかを、先の経済政策、「中間的身分」という理念以外の個別具体的な政治的要求や彼らの行動に照らして実

証的に確かめることはあまりなかった。他方、出版の自由に関する先行研究は、自由主義者が法治国家や代議制確立のために出版の自由を要求したことを指摘するものが中心であり、出版の自由が自由主義者の社会理念と結びつけられて考察されることはなかった。

そこで本稿は、自立した家父長からなる共同体、「階級なき市民社会」といった理念が出版の自由に関する見解と運動に見られるのかどうかを実証的に考察することで、出版の自由を自由主義者の社会理念の観点から再考するとともに、彼らの社会理念の可能性と限界の両面に光を当てることを試みた。本稿が対象とする時期は一八三一年と一八四〇年代であり、おもな史料としてはバーデン第二院議事録、『国家辞典』などの自由主義者の著作、そして自由主義者が刊行した新聞を用いた。

第二章と第四章では出版の自由に関する議会の議論に着目した。その結果、出版の自由に尽力した国法学者カール・テオドール・ヴェルカーは代議制の維持、官僚の不正を防ぐ観点から出版の自由を重視していただけではなく、それが人々の政治的教養、精神的発達を促すことをも期待しており、他の自由主義者もこうした教育的意図を大枠で共有していることが明らかとなった。確かに、出版の自由を定めた法律の規定とその審議の過程にも、自由主義者の社会理念の限界が表れていたと言えるだろう。自由主義者は財産を持つ人を「信頼できる人」と考えており、出版物の刊行条件として、下層の人々が支払うことができない高額な保証金に賛成し、あるいは彼らが起こす革命に潜在的な恐怖を抱いていた。しかしながら、出版の自由に関する理念には、「公益」を目指す政治理念、経済的、精神的に自立した人間を育成する教育的意図も見られ、自由主義者は一八三一年、一八四〇年代の議会の議論において、出版の自由の享受者として下層の人々を含む広範な人々を念頭に置いていたことが確認されるのである。とりわけ第三章で明らかにしたように、ヴェルカーは、出版の自由が多くの人々の公的活動を可能にし、それが人々の政治的自立、道徳的教育を促進し、かつ市民が持つべき気質を身につけることにもつながると考えていた。実際、新聞や祭典報告からは、自由主義者が様々な機会を通じて住民との接触を図っていたことをうかがい知ることができ、彼らの教育的意図や理念は、その行動に裏打ちされたものであった。こうしたことから、出版の自由をめぐる自由主義者の理念には、その社会理念の閉鎖的側面と同時に「自立した家父長」の増大を念頭に置いた教育的理念も見られ、出版の自由に見られるこうした見解と姿勢は「階級なき市民社会」という理念を反映したものであったと結論づけた。

二〇一一年度卒業論文題目

［日本史学専攻］

古代の大地観
　―国引き神話に見える大地のイメージ―　　堀田　昇

推古即位の政治史的意義　　小柳　響子

藤原道綱についての一考察
―官人としての働きを中心に―　波塚希久子
藤原仲麻呂政権末期の政治的情勢について　橋本　剛
「任那の権益をめぐって　白村江の戦いに至るまで」の考察　坂本　安英
享徳の乱以前成田氏の考察―安保氏との関係性から見る鹿角・武蔵両地域の考察―　石渡　弘真
上杉氏の政権構造と上条宜順　渡辺　勝巳
徳川吉宗の経済政策　安田　結香
近世における海運　小泉　哲平
江戸城大奥の研究　後藤　智代
江戸時代のごみ事情　山本　春菜
江戸時代における「旅」　若松　未来
新公娼制度と廃娼論
―廃娼論は女性を救うものであったか―　岡村麻里奈
三菱の初期高島炭鉱経営について　島田　英明
東京における水洗トイレの変遷　中島　匠
日本における民営化―日本国有鉄道・日本電信電話公社の事例について―　山口かおり
日本語における横書きの浸透と使用実態
―鉄道の駅名標表記を中心に―　阿久井亮佑
占領期におけるGHQのメディア検閲
―検閲から見るGHQの戦後日本の統治姿勢―　生出　拓也
佐野常民と「平和の戦争」
―近代日本の博覧会政策―　柴田真梨子
自由民権運動期五日市における学習運動
―深沢家を中心に―　杉山　りか
日本海軍暗号・外交暗号・ドイツエングマ暗号の比較
―米英の解読プロセスを踏まえて―　高橋　史
伊豆半島の繁栄と衰退の歴史
―海運を中心に―　西野　耕平
大正時代における育児と職業従事の両立
―母性保護論争をもとに―　新田あゆみ
陸奥宗光の海外留学についての一考察
―経済史的視点からの再検討―　保久村達朗
一九八〇年代以降のフジテレビのコントバラエティの研究　横田　成彬
昭和戊辰（一九二八年）における会津若松―ローマ市寄贈記念碑を巡る言説と寄贈意義の捉え直し―　宇川　洋昭
喜田貞吉の著作から読み取る明治期国定歴史教科書の性格　伊賀　航介
吉原の衰退と近代化　須貝　健斗
戦後日本の農地改革
―「民主化」への動きの中で―　山口　敦

［東洋史学専攻］

近世・近代地中海世界における海賊と国家
―バルバリア海賊の存在を通じて―　小川　雅人

現代医療の問題点と代替・補完医療としてのアラブ・インド
伝統医療の可能性
―「代替」から「統合」を目指して―　金本　和子
イラク戦争と石油の関わりについての検証　久下　希
一九世紀後半におけるイズミルの養蚕業の復活　鈴木　真吾
エジプトにおける「アラブの春」
―ソーシャルメディアが担った役割の再考―　五月女菜穂
初期アッバース朝における翻訳運動　辻　紗央里
勧善懲悪委員会とメッカ女子校火災事件　徳田　達也
ムスリム同胞団 vs. アル・カーイダ
―イスラーム復興運動組織の比較―　野沢　麻美
日本の新聞における「イスラム原理主義」という言葉　山下　卓真
アラベスク
―オリエンタリズムの再検討―　山田　珠央
ムハンマド風刺画問題とその背景
―欧州でムスリム移民が直面する実情を探る―　山本　英里
オサマ・ビン・ラーディンの生涯と殺害をめぐる報道　レダ　太郎
『熱河日記』に見る一八世紀末李朝知識人・朴趾源の中国観
―明清を中心に―　大久保元恵
日本におけるムスリム社会の歴史と現状
―子弟教育問題から見える現状―　川上　悠
清代科挙制度に対する一考察
―郷会試における首場偏重を通して―　小泉　佑典
中国の幽霊　外所　英晃
古代中国における酒の発明と生活への浸透　中村　大樹
東京都におけるインド系移民の動向と展望
―インド人学校の在り方から考える―　服部　真琴
明代宦官隆盛に関する一考察
―明初の時代背景を中心に―　藤森　良太
マレーシアにおける政治システムと格差是正策の展開
―インドネシアと比較して―　松邑　翔太

［西洋史学専攻］

シェイクスピアの悲劇―一六〇〇年以降シェイクスピアが
悲劇しか書かなかった真相―　及川瑠美子
アメリカの「暴力」―権力抑止としての市民武装の
伝統と軍国主義への信頼醸成―　大橋　祐介
結婚制度から見る近世イギリスとフランスの女性　風間ひろみ
マルコムXのNOI離脱・メッカ巡礼後の思想
―一般的イメージへの反証―　浅野　貴文
米西戦争―アメリカの戦争起源とフロンティアを
求め続けるアメリカ―　木戸　悠佳
エリザベス朝黄金時代の評価　金子　祐介
ベトナム戦争におけるアメリカ合衆国の政策決定過程
菊池　咲
クレア・マッカーデルと二十世紀アメリカ社会　鈴木まりの

『魔女への鉄槌』から見る魔女の存在理由における考察　藤倉　宏樹
ジャック・ジョンソンから見る黒人差別について　河谷　航希
バルトロメオ・プラティナ「教皇史」―“Liber Pontificalis”（教皇の本）との比較から―　鈴木　崇啓
私掠統制の力学―イングランドの政策とバッカニア Sir Henry Morgan の生涯を通して考察する―　武重　圭祐
ナチス政権下ドイツにおけるホロコーストの思想背景　田中　龍一
四世紀末におけるキリスト教禁欲主義とその受容―ノラのパウリヌスに見る一事例―　林　皓一
山賊サルヴァトーレ・ジュリアーノから見る シチリアのマフィア　真鍋　麻紀
ドイツ国民概念の誕生―フィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』における国民―　江原　佑弥
フォイエルバッハとマルクスの差異―疎外論を中心に―　大庭　直人
ドイツ三月革命における大衆蜂起―農民と手工業者の革命―　樫村　洋祐
軍産コンプレックスの実態―ベトナム戦争期のアメリカ―　谷藤麻衣子
東京裁判の画期性と限界　鷲津　弘展
アメリカ黒人の歴史―公民権運動および非暴力思想の歴史的意義―　和田　卓也
フランス法の発展と民法典―民法典成立の経緯とその受容―　篠崎　淳希
十七・十八世紀フランスにおけるヴェルサイユ宮廷の存在意義　庄沙　智子
十七・十八世紀イギリスの森林状況―John Evelyn を中心に―　園田　昌也
十九世紀ロンドンにおける同性愛者への反応について―オスカー・ワイルドを通して―　辻　沙希
水と清潔の歴史―十九世紀パリを中心に―　土橋　和佳
十七・十八世紀のヴァージニア植民地の隆盛―タバコと移民を通じて―　内海　俊弘
カラカス会社設立に見るスペインとカカオ貿易　小西　麦十
ウィルソンの平和への追求と挫折―WPPとの関係性からの考察―　滝澤永理子
記憶の中の音楽―ショスタコーヴィッチの交響曲第七番とペテルスブルグ市民―　市川　潤一
ロンドンのブルジョアジー文化と香水　稲川　文香
博覧会にみるイギリス帝国プロパガンダ　大橋　麻美
フランス宮廷社会における食文化について―カトリーヌ・ド・メディシスの結婚を通して見るイタリア食文化の影響―　鈴木　彩夏
高級モード誌ガゼット・デュ・ボン・トン（一九一二年―一九二五年）から見るフランス戦間期のモードと文化　田辺　理紗

十八世紀におけるイギリス系年季奉公人の移住背景
—プッシュ要因とプル要因の再検討—　和田　圭
アイルランドのキリスト教化—聖ブリジッドに見る
キリスト教とケルト文化の混交—　布野　真秀
ウィリアム・ラヴェットの教育論　古田　樹里
百年戦争期のフランス軍と傭兵　益子　皓

［民族学考古学専攻］
一乗谷朝倉氏遺跡における武家屋敷土塁の研究　岩崎　瑛司
レプリカ法による土器圧痕の検討—千葉県山武姥山貝塚遺跡
出土土器を対象として—　大木さおり
近代日本における西洋音楽の受容—東京ラジオリスナー調査、
ラジオ放送時間をもとに—　大谷美保子
琵琶湖周辺の城郭—分布と立地—　小嶋　茜
江戸時代の集団墓地内における特殊な埋葬施設
—増上寺子院源興院を中心に—　佐久間健吾
メキシコの「悪魔」仮面にみる多様性
—物質文化を用いた文化創出の研究に向け—　佐山　のの
考古学の研究成果と社会の関係
—土偶研究の高校教科書への反映をめぐって—　鈴木　絢子
完新世以降における浜名湖周辺地域の環境変遷と
人間活動の関係史—律令期を中心に—　鈴木　啓介
観光資源化に伴う阿仁マタギ文化の変遷　鈴木　康正
旧独領ニューギニアにおける民具収集の現場—慶應義塾大学
所蔵小嶺コレクションの分析に向けて—　諏訪真衣子
奄美大島・加計呂麻島の石干見（カキ）について
—地理的分析を中心に—　田渕　博昭
銀座と街路樹の歴史　遠山裕佳里
横浜案内図に描かれた十九世紀後半の横浜　藤田　絢花
日本におけるペルシア絨毯販売形態の変遷
—在日イラン人の本国との関係性—　山下　絢
東京都区内における寺社の御守
—その種類と購入目的—　吉澤クルミ
ヘレニズム時代の輸送用アンフォラに関する
産地別型式の再検討　渡邉　絢